

第4回講演会

「新たな時代における資格・検定試験のあり方」 レポート



平成25年10月4日(金) 午後1時00分～午後4時30分
東海大学校友会館 望星の間

信頼と安心の検定を目指す

全検
ZENKENKIKOU
機構



上月 「まさに玉石混交で、民間がやるということは需要も高まっていいという議論に合わせ、自由度を尊重しつつ質をどう確保していくのかは、大きなポイントだなと思いましたね。2000年代の前半には、小泉改革で、できることは民間にという機運があったのですが、後半に入ると、『それでいいのか』という雰囲気もあったんです。検定団体の不祥事や問題もありましたし、継続性が重要と





第三者評価組織を作って評価する。そういうのがいいかなと思って作ったんです。当初は、行政が関与するわけでもないのにそうしたガイドラインを出すことが関係者から理解されなかったのですが、大手をはじめ採用する事業者さんもあり、評価組織に関する話も聞きますので、よかったのかなと思っています。それと、当時思ったのは、質保証のガイドラインがあるわけですから、もし、検定への後援名義を求められれば、ガイドラインを基に考えますよ、ということです」

吉田 「それは基準がしっかりしていれば、民間がやってる検定とか認定に対して文科省の後援がありうるということですか」

上月 「そうです。ただしコール条件じゃないですよ。それをひとつの大きな要素にするということです。ただ、それは段階的な話で、さきほどのような第三者組織が認定していくのが、将来的には一番いい姿だと思います」

吉田 「行政がやることをちゃんとやってくれて、民間は、今回の全検ではないですが評価基準を自分たちで作るなどやってくれて、で、それを担ってくれる団体がいくつかあって、それでタッグを組めれば、うまく動くと思うんですよ。半沢直樹じゃないですけど、民間には、行政っていうのは検査だの査察に入るっていうイメージが強いんですよ。だから、“一緒にやる” ってことを発信できれば、大分違ってくるとは思うんですよ」

上月 「目的を共有化するということですよ。役割はもちろん違うんだけど、役割をお互い尊重して目的を共有できれば、非常にうまくいくことが多いですよ」

吉田 「僕はよく役所の方に言うんだけど、自分たちで飯を食っているのだから民間はお行儀悪いですよ。それを『お行儀悪い』って言われちゃうと、前に進まなくなっちゃう。なので、これから改善が必要な部分もあることも前提にして、文科省にも理解してもらって組んでいければいいと思うんです」

上月 「生涯学習政策局っていうのは、予算も少ないですし、権限もほとんどないんです。そうすると、民間の方と一緒にやらないと、政策のミッションを達成できない立場なんです。さっきも言ったように、目的が共有できれば、民間の方もいろいろな方法論を持っていますので組んでやっていけると思います」

質疑応答から

Q

現在、厚生労働省が幅広く認定、指導というのを
行っています。
そういうものとの関係をどう考えますか。

A

あまり詳しくはないですが、厚労省は、安全性や職業能力の仕組みを持っているので、その関係で出しているのだと思います。一時は我々もそうした、個別認定をする方法も考えましたが、労力に対し、効果が少ないと判断した経緯があります。そうしたこともあり、ガイドラインというものが生まれたのですが、それに沿ってもらえれば、皆様方の事業の信頼度が増すという参考例になったと思っています。少なくとも教育関連部局としては、さきほどの民間との関係で、バランスが取れるのではないかと思います（上